

年 頭 所 感



会 長 小 野 勝 次

あけましておめでとうございます。新年にあたって、会員の皆様一言ごあいさつを申し述べさせていただきます。

わがOR学会も、昨年春、待望の法人化をおえ、社団法人として新発足いたしましたことは忘れられない思い出であります。形がととのいましたこの機会に、学会の内容を充実して、名実ともに学界に雄飛し、産業界に寄与するよう、会員一同力をあわせてはげもうではありませんか。

わがOR学会は、その性質上、学界における俊秀を集めて研究業績を挙げるとともに、その成果を産業界その他で実践できるようにしなければなりません。このうちの一方でも欠けるならば、学会の発展は偏ったものとなり、本来の目的を達成することはできません。

幸いにしてわがOR学会にはすぐれた研究者が加盟し、また産業界における有力な機関の後援を得ています。しかし、欲をいえばきりがないかもしれませんが、まだまだ底辺を飛躍的に拡大する余地も残しています。ORが直接または間接に関与すべきところでありながら、わが学会とは未だに緊密な連絡を欠く分野が多く残っていることを私はおそれています。

ORの健全な発展のためには、研究開発とともに、各分野への浸透が必要です。ORの浸透には、産業界その他の諸機関の関心を得るとともに、経営陣ならびに一般産業人の関心を惹くことがたいせつであります。これらの人々による正当な評価を得ることがたいせつであります。

ありのままのOR活動を知っての上でなら、批判的意見も結構、けっして好意的意見のみを求める必要はありません。とにかく、ありのままのOR活動を知りその将来性を検討してほしいのです。そのために一般産業人の関心を惹き忌憚ない意見が望まれるのです。

ORの評価は、ORによって何がなされたかということより、ORによって何がなされるであろうかというORの将来性に対してなされなければなりません。今後の発展に期待するという意味では、若い学生諸君への浸透が望まれます。現在のところ、これが最もたいせつなことかもしれません。教育界において指導的地位にある有力な会員各位の努力によって、この方面でも十分広くしっかりした底辺を築いておきたいものです。

新たに迎えたこの年が、OR活動そのものの飛躍の年であるばかりでなく、底辺への浸透、拡大の面でも目覚ましい成果を挙げて、次代の人々から現在のわれわれOR人がよくぞやるべきことをやってくれたといわれるよう、皆で力をあわせて努めようではありませんか。



編集委員長 青山博次郎

一年の計は元旦にありとあって、年の始めにはいろいろな計画を思いめぐらす習慣があるが、編集に携わってきて考えたことをここに記しておくのも、将来の役に立つのではないかと思うしだいである。

編集をやっていると、学会誌についての会員の方々のいろいろなご意見が耳にはいつてくる。どうにかしたいと思うがなかなかふんぎりがつかない。このためには編集のORが必要なのである。そこでまずどんな会員構成であるかを知るため、手許にある1970年度の会員名簿を整理してみた。所属が企業、公共機関などの方（A会員）が815人、官・公・民を問わず研究機関の方（B会員）が135人、大学などの学校関係の方（C会員）が365人、不明12人、計1,327人という内訳であった。

『経営科学』と『JORSJ』の二つの機関誌をどんな方針で編集していくかを定めるためには、両誌に対する満足度が測定されていなければならない。いろいろ耳にしたことを参考にして仮りにA会員すべての評価が『経営科学』、『JORSJ』の順に1, 0, B会員のすべての評価が1, 2, C会員のすべての評価が0, 2としてみよう。不明の人を除けば『経営科学』は平均満足度0.72, 『JORSJ』は平均満足度0.76を与えていることになる。もし現在の発行形態を変えず、記事内容のみを変えるとしたとき和文誌の評価がA, B, C会員についてそれぞれ2, 1, 0となるような編集のやり方, 1, 1, 1となるようなやり方などが考えられる（もちろんこのほかにもあるが、調査しない限り反応データは得られない）。前者の場合は和文誌をA会員向きに内容変更することであり、後者の場合は中間的な編集方針をとることを意味する。人数を考慮するとき、もしこの二つの手だけなら前者のA会員向きの内容変更が全会員へのサービスをよりいっそう向上し、『経営科学』についての平均満足度は1.34となる。ここで英文誌についてはその性格上現状のままにしておく。

一方において英文誌と和文誌の費用はほぼ1:2となっているので、和文誌はA会員（ほぼ全会員の62%）へのサービスを重点的に、英文誌はC会員（ほぼ全会員の28%、したがってC:Aはほぼ1:2）へのサービスを重点的に考えるようにしても、会員のうけるサービスは平均として向上し、費用の面からも同程度のサービスに近くなることも確かである。B会員についてはC会員に近いものとして考えればよいだろう。

このように現在の発行形態を変更しない場合のほかに、発行形態を変更する場合も考えられるであろう。また会誌発行は会員の満足度だけではなく、世界に日本の研究を発表し、学界レベルを向上していくことにも意義があり、効果は多面的である。

昨年「会員の声」欄を設けたのも、いろんな反響を知りたいこともあったが、会員各位の活発なご意見をできる限りとり上げて行かねばならぬと思っている。